

## 中学校技術・家庭科保育領域における中学生の幼児理解

### 第2報 生徒の製作したおもちゃ

愛知教育大学 家政学教室 中村 喜美子  
一宮市立南部中学校 山田 弘実

#### I. はじめに

中学校技術・家庭科保育領域では、幼児に適した遊び道具の製作を通して幼児の遊びを中心とした生活について指導すること<sup>1)</sup>が示されている。筆者らは先に、保育所見学による幼児観察の後におもちゃを製作し、そのおもちゃを媒体として幼児と遊ぶ授業過程における中学生の幼児理解を検討し、おもちゃ製作前後に保育所見学を行うことの有効性を明らかにした<sup>2)</sup>。本報ではその授業過程で生徒が製作したおもちゃについて報告する。

#### II. 研究方法

##### 1. 調査対象

調査対象は前報と同様で、一宮市の公立中学校の3年生女子生徒152人が製作したおもちゃ36個である。おもちゃを製作する際に教師が生徒に指導したことは、①幼児がからだを使って遊べること、②大勢で遊べること、③幼児に人気がなかったらどうするか考えることの3つであり、おもちゃはからだを使って集団で遊べるものが多かった。

##### 2. 調査方法

調査方法は前報に示したものの他に、おもちゃの機能性、大きさ、材料などを観察した。

##### 3. 調査時期

調査時期は昭和63年8~12月で、おもちゃの観察は生徒が幼児と遊んだ後の8月に行った。

#### III 結果

##### 1. 遊びの種類からみたおもちゃ

36個のおもちゃを感覚遊び、運動遊び、構成遊び、模倣遊びおよび受容遊びに分類し(表1)、遊びの種類別に検討した。

運動遊びにはキャタピラや缶のりなどからだを使って楽しむおもちゃがあり、25個(69%)と多く、さらに、全身運動、ボール投げ、手先の運動

に分けることができた。さいころをふり、幼児自身が駒となって遊ぶおもちゃを人間双六と名づけた。「ダンボールのタコ」(キャタピラ、図1)は表側に海の生物の絵を貼りつけたダンボールの中に入れて四つん這いになって進むおもちゃで、透明ビニールを貼った窓が4つあった。「ビニール風船」(全身運動その他)と生徒が名づけたおもちゃは65×80cmのポリ袋4つの各2辺を切り開いてセロテープでつなぎ、空気を入れて大きな風船にしたものである。空気をつかまえて遊ぶことから、科学的なものの見方の芽生えを養うことができる。ボール投げにはボールと的があるが、1つは的のみで保育所のボールを利用していった。また、ボーリングの1つはピンが立体パズルになっていた。

表1 遊びの種類別にみたおもちゃの種類

遊びの種類	おもちゃの種類	個数	
運動遊び	キャタピラ	5	25
	缶のり	3	
	トンネル	2	
	人間双六	2	
	その他	3	
運動遊び	ボール投げ	4	25
	ボール当て	2	
	ボーリング	2	
運動遊び	手先の運動	2	
構成遊び	パズル	5	7
	福笑い	2	
模倣遊び	家	2	3
	ままごと	1	
受容遊び	絵本	1	
感覚遊び		0	

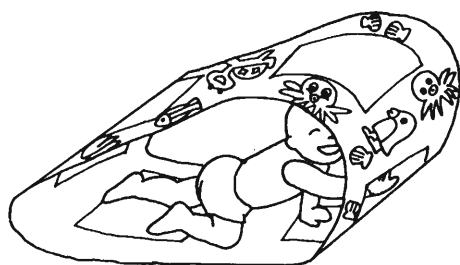


図1 ダンボールのタコ

構成遊びのおもちゃは7個あり、パズル(立体2個, 平面3個)と福笑いで, ものを構成したり創造したりして楽しむおもちゃである。「立体パズル」(写真1)は8つの直方体(35×25×13.5cm)の組み合わせから成っており, 10面にそれぞれ動物や花が可愛いく描かれていた。

模倣遊びには家とままごとがあり, ごっこ遊びを楽しむおもちゃである。2つの家は0.9~1.3㎡の床面積で高さが約1mあり, 中に幼児が2~3人入って遊べる広さがあった。かなり大きかったので, 丈夫なダンボールを用いた1つはしっかりと立っていたが, 他方は幼児が家と認識せずキャタピラにして遊んでいた。ままごとはフェルトと紙で作ったままごとセットで, マジックテープとスナップを使い, バナナの皮をむいたりえんどう豆を莢から出したりできるようになっていた。

受容遊びのおもちゃは子どもたちに人気のあるアニメの登場人物を両面に描いた2枚の厚紙をビニール紐でつなぎ, 繰り返しめくって絵を楽しむものであった。前報で観察した「おもちゃの与え方」の授業では, 導入にこれを取りあげている。

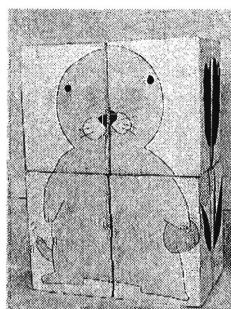


写真1 立体パズル

## 2. 幼児の発達段階との関連

殆どのおもちゃが幼児の発達段階に適しており楽しく遊ばれた。例えば, 缶のりでは缶の高さが4~12cmの範囲で数種類あり, 発達段階に応じて高さを選ぶことができた。しかし, 紐の長さが短すぎて幼児に合わなかったものがあり, その場でビニール紐をつけ足して使っていた。

一方, 難しすぎたことに気づいたおもちゃには「色でステップ」(全身運動その他, 図2)があった。これは白い布地に赤, 青, 黄, 緑のマジックで円を描いたおもちゃで, 「右手を赤に, 左足を青に」と指示された色の円に手や足を置いて進んで行く遊びである。お手玉も作っており, 円の中に投げ入れて遊ぶこともできる。全身を使う運動遊びであると同時に色彩感覚やルールの理解力を育てる。右手を示す札を手首にはめて右手を区別させたが, 幼児には左右の識別を瞬間的に行うことは困難だった。より簡単なルールにすれば楽しく遊べたと思われる。

## 3. 遊び方と工夫・発展性

遊び方が独創的なおもちゃには「ふみふみぐちゃ

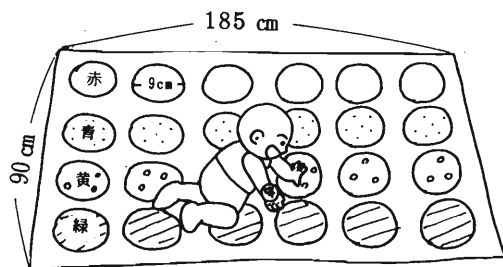


図2 色でステップ

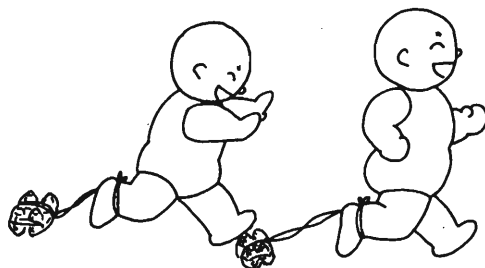


図3 ふみふみぐちゃ

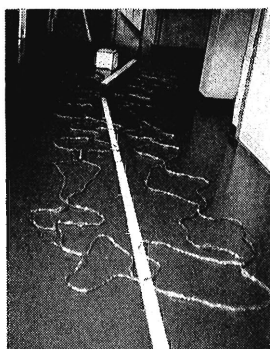


写真2 すごろくポンポン

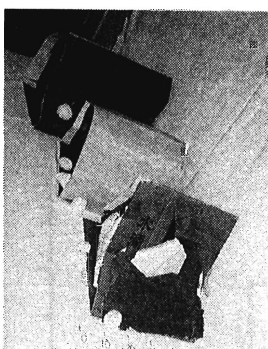


写真3 ボール当て

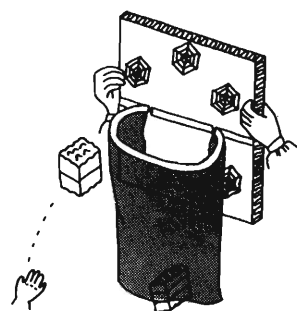


図4 みんなのバスケット

ャ(全身運動その他、図3)があった。これは卵パックに赤、青、黄(交通信号の色)のセロハンを巻きつけセロテープでとめ、1mのビニール紐で結んだものである。これを足に結んで幼児がお互いに踏み合って遊ぶ。上手に踏み合くと卵パックがつぶれて「グチャ！」と音がする。

また、幼児が遊び方をいくつも考え出したものには「すごろくポンポン」(人間双六、写真2)、キャタピラ、ボール当てがあった。「すごろくポンポン」はダンボールで作った一辺25cmの立方体のさいころをふって、出た色と同じ色の鎖編みの輪(円周2m)まで、幼児自身が進む双六である。輪は30個あり、これを延ばすと27mの長さになる。さいころの他に色のビニール紐で作ったポンポンもある。幼児は双六の他に、さいころでドッジボール、輪で電車ごっこあるいは大縄跳びにして遊んだ。「ボール当て」(写真3)は異なる高さ(48～58cm)の山の形をした3つのダンボールの6面に黄、黄緑、青、紫、赤、桃色を塗ったB紙を貼り、指示された色の的に紙で作った直径6～8cmのボールを当てるおもちゃである。幼児はボールをダンボールの山に当てて遊ぶだけでなく、山の間をくぐったり、こわして車の型にしたり、平らにして幼児が乗り生徒に引かせたり、ボールをべちゃんこにして団子にして遊んだ。また、キャタピラは車(上に乗る)、電車(横にして中に入る)、冢などにもなった。

#### 4. 安全性と丈夫さ

安全性についてはかなり配慮されており、危険を感じるものは殆どなかった。缶のりは空き缶を使っているの、切り口をビニールテープで覆っ

たものがあった。「みんなのバスケット」(玉入れ、図4)ではゴールの針金にパンティーストッキングをかぶせてあった。ボールにはスポンジを使い、幼児に当たっても痛くなく、洗うこともできる。

丈夫さについてはボール当てなど14個(89%)のおもちゃが悪かったと自己評価しており、多くのおもちゃが丈夫でなかった。丈夫だったものには前述の「立体パズル」があり、頑丈なダンボールの空き箱に画用紙を貼り、その上にB紙をしっかりと貼ってあったので、幼児が乱暴に扱っても破れなかった。一方、「ふみふみぐちゃ」では幼児がお互いに夢中になって踏み合うので、セロハンは破れ、紐は取れた。卵パックは一度踏みつぶすと再びもとに戻らないので一回限りの使い捨てのおもちゃになってしまった。材料や接着方法を工夫すれば、もっと壊れにくくなったと思われる。また、「ボール当て」では生徒が考えた、ボールを山に当てたりダンボールの中に入る遊びだけでなく、幼児が様々な遊び方をしたので、ボロボロに破れた。よく遊ばれる程おもちゃは壊れるが、おもちゃには幼児の活発な動きに勝る丈夫さが望まれる。

#### 5. おもちゃの製作に用いた材料と道具

おもちゃの材料は紙、布、ビニール、セロハンの他、割箸、空き缶、針金、鈴、パンティーストッキング、紙粘土、大豆、小石、テニスボールなど、日常、家庭で普通にみられる様々のものが用いられていた。これらの材料を紙、布、木、金属、化学製品に分けて使用割合をみたところ(図5)、ダンボール、B紙、画用紙、色紙などの紙製品が33個(92%)と最も多く、次いで、ビニール紐、セロ

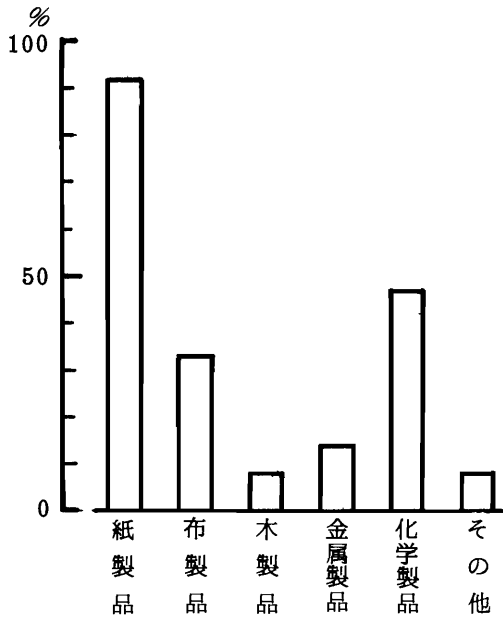


図5 おもちゃの材料の製品別使用割合

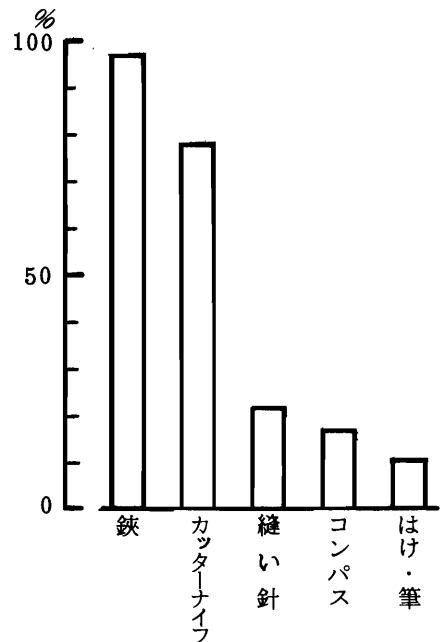


図7 おもちゃの製作に用いた道具

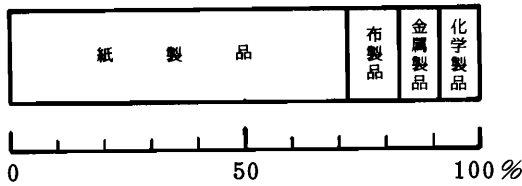


図6 おもちゃの主材料

ハン、ビニール袋などの化学製品が17個(47%)、糸、フェルトなどの布製品が12個(33%)使われていた。

次に、これらの材料の中から、主に使った材料(主材料)をおもちゃ1個につき1つ選んでみると(図6)、最も多いものは紙製品26個(72%)の中でもダンボール19個が多かった。布製品(フェルト、布)4個、金属製品(空き缶)と化学製品(ビニール袋、ビニール紐、卵パック)は各3個であった。電器店でテレビや冷蔵庫の大きくて丈夫なダンボール箱を分けてもらった例もあるが、どのおもちゃも日常、家庭にあるものが使われていた。

これらの材料を使っておもちゃを作る際に用いた道具を図7に示した。鉄とカッターナイフが殆どのおもちゃに使われていた。図に示さなかった

が、他に、ミシン、金槌、きり、ペンチ、ドライバが用いられていた。

#### IV 考察

遊びの発達の変化をみると<sup>3)</sup>、最も早くあらわれる遊びは感覚遊びと運動遊びである。感覚遊びが2歳頃まで好まれてその後少なくなるのに対して、運動遊びは手足を動かすことから三輪車やブランコにのるというように内容を変えて学童期まで好まれる息の長い遊びであり、幼児期には大きい運動から細かい手先の運動が形作られる。横做遊びは想像力が豊かになるにつれてごっこ遊びとして好まれ幼児期の遊びの半分を占めており、構成遊びは幼児期の終り頃に盛んに遊ばれるようになる。受容遊びは3歳頃でやや盛んになるが幼児期の終り頃になって子どもが本当の意味で楽しむことができるようになる遊びである。幼児を観察した生徒が感覚遊びのおもちゃを作らなかったことは、幼児の発達段階に合った集団で遊べる感覚遊びのおもちゃを思い付かなかったためであろう。

多くのおもちゃが壊れ丈夫さに欠けた原因は紙製品が多かったことによると思われる。プラスチック製品は軽くて丈夫でおもちゃの材料として適しているが、簡単に加工できないため、生徒が使用

するには適していない。丈夫さを増し簡単に加工できる材料としては木材が考えられ、例えば、家の柱、ボール投げの的(当て板、輪投げの棒)などに木材を使えば、より丈夫にできたであろう。指導書には、おもちゃの製作に当たって、「被服」、「木材加工」、「機械」や美術科などの既習事項との関連を図る<sup>1)</sup>とされている。生徒達は保育の学習以前に技術系列を履修していない。もし、木工1を履修していれば木材をもっと多く使ったかもしれない。木工1を履修し、かつ、保育を共学で学んだ例<sup>4)</sup>では、主材料に木製品を用いたおもちゃは男子50%、女子13%であり、道具では鋸やすり、かんな、ドリルなども使われていた。教師の指導によって、生徒は既習事項を活用し様々な材料や技法を用いておもちゃを作る。

4～5人の共同製作だったので、生徒は知恵を出し合い、材料や作業を分担して、独創的なおもちゃを創り出した。おもちゃは幼児の遊び方まで考えて作られており、幼児に人気がなかったらどうするか知恵を寄せあった様子がかがわれる。幼児を実際に遊ばせてみて、生徒は予想を超えた遊びの発展に驚き、おもちゃが幼児の発達段階に適しているか検証し、幼児理解を深めた。このような素晴らしいおもちゃを創り出した背景には、観察した幼児と一緒に自分達で作ったおもちゃで遊ぶのだという動機づけが効を奏していると考えられる。2回の保育所見学を含む指導過程は中学校の近くに幼児施設が存在しその協力が得られるという条件を必要とするが、保育領域の指導方法としてぜひ取り入れたいものである。

最後に、本研究を行うにあたり、前一宮市中学校校長伊藤二三雄先生のご協力をいただきました。また、資料の収集は本学学生伊藤陽子さん、加藤増美さんおよび花田みどりさんの助力を得ました。深く感謝致します。

(1989年12月25日受理)

#### 参考文献

- 1) 文部省：中学校指導書 技術・家庭編：125～126、開隆堂(1985)
- 2) 中村喜美子他：中学校技術・家庭科保育領域における中学生の幼児理解—保育所見学を行って—、愛知教育大学家政学教室研究紀要、20：103～109(1989)
- 3) 山下俊郎：幼児心理学、p 288～295、朝倉書店(1971)
- 4) 中村喜美子他：男女が共に学ぶ保育—おもちゃ製作を通して—、家庭科教育、63(11):42～46(1989)